研究ノート

バリの風土と家系についての考察
（バリ〈島〉の歴史）（Ⅻ）

松 原 正 道※

序

「人間」，それは，この世に生まれた瞬間からその「生きる」がその時々の「時代」の流れの中にあって変転を余儀なくされざるを得ない存在であると言える。

そして，その「生きる」を天寿を以て全うする者がいる一方，外部の力を以てそれを絶たれる者，また，自らの手で以てその「生きる」を絶つ者と様々である。

それを「運命」と言う者もあり，その「運命」は如何ともし難いものであると言う者もいる。一方では，この「運命」をその「力量」を以て自らの手で切り拓くのも「人間」であるとするのである。

戦前からバリ（島）に住み，現地の人々の中に融け込み「トアン・ミウラ」（三浦の旦那さん）として親しまれていた三浦襄氏（明治21＜1888＞・8・10－昭和20＜1945＞・9・7）。

写真１　三浦襄氏

※淑徳大学名誉教授

時の流れ，それは，大東亜（太平洋・第二次世界）戦争として世界の人々の「生きる」に多大な影響を与えたのだったが，それは三浦氏にとっても例外ではなかった。

昭和16年に帰国していた同氏のバリ（島）における資産が６月にはオランダによって凍結されてしまったという状況のもとで大東亜（太平洋）戦争が勃発。それに伴ない三浦氏に軍（海軍）からの要請がもたらされたのである。

そして，昭和17年２月19日の未明におこなわれた日本（陸）軍によるバリ（島）上陸作戦に関わる事で以て，その後，戦争終結まで続くのだった。

Ⅰ

大正８（1919）年に行われた第１次大戦のためのパリ講和会議において，アメリカにおける日系移民排斥を念頭にした人種差別に対してこれの撤廃を日本は主張したのだが，それは欧米諸国によって一蹴されてしまったのである。この時，明治政府にとっての最大とも言える外交成果としての「日英同盟」（明治35＜1902＞－大正12＜23＞）は未だ有効だったのであるが。

従って，「一等国」を目指す日本にとってこれは屈辱的な事であるとして，その後の対欧米政策・外交に尾をひくものとなったのである。

そして，それは，昭和４（29）年に世界恐慌が起こる事によって，その後の世界は排他的なブロック経済の傾向を強め，特に，植民地の資源を独占する英米がこれを推進したため，その与える影響は大きく，その点で，「持たざる国日本」の苦悩は深まっていくのである。

第一次世界大戦に際しては，「日英同盟」の関わりからこれに日本も参戦し，戦勝国の仲間入りをしたのだったが，戦後（勝）景気とも言うべきものの後，その反動とも言える不景気（恐慌）がやって来るのである。

そして，この大戦を契機に国際社会の主導権はイギリスのそれからアメリカへと移り，ブロック経済の側面とも言える，自らの主張で以て設立されたにも関わらず国際連盟には加盟せずに，アメリカは国際社会から一歩その身を隔てる立場をとるのだったが，一国で独立自存が出来る強国へと発展してきていたのである。

世界恐慌が起こった時には，既に，日英同盟は解消しており，その後，日本は昭和６（31）年９月の柳条湖事件をキッカケに満州事変（昭和６＜31＞）を起こし，７（32）年には傀儡政権の「満州帝国」を建国した事で以て欧米列強に警戒心を持たせる事となるのである。

そうした流れの中で，満州事変の調査のため国際連盟から派遣された調査団が現地を訪れるのである（７＜32＞）が，その団長になったのがイギリスのリットン伯爵 Victor Alexander George Robert, 2nd Earl of Lytton（1876-1947）だった。

そして，その調査は「リットン報告書」として纏められたのだが，日本にとっては決して有利に働くものではなかった。

そのため，これが国際連盟に付託されると，連盟総会で日本の反対，タイの棄権はあったものの42ヶ国によって採択されたため（８＜33＞２・24），日本は常任理事国だったにも関わらず国際連盟を脱退すると言う挙に出たのである。

> 欧米諸国とりわけアジアに植民地・特殊権益をもつ列強は，国際連盟脱退後の日本のさらなる対外的膨張を危惧した。しかしながら，それと同時に列強は，日本が中国大陸にエネルギーを注ぐことで東南アジアの植民地に対する政治的，軍事的な関心を弱めるだろうと期待感も抱いた。満州事変を「歓迎すべき出来事」とみなしたオランダ（後略）
>
> 後藤乾一『東南アジアから見た近現代日本』　岩波　2012
> 125頁

と言われる一面もあったのであるが，我が国はその後の国際社会において孤立化を強めていく事になるのである。

そうした中で，昭和12（37）年７月の盧溝橋事件を契機として日中戦争（昭和12＜1937＞－20＜45＞）が勃発，当初の思惑とは違い泥沼化してしまい，そうした日本の対応を快く思っていなかった欧米諸国にあって，昭和16年になると石油の最大供給国だったアメリカが，対日石油輸出をストップさせるのだった。

この事は，日本にとって，経済のみならず政治的にも大きな影響を受けるものだったため，何としてでもその打開策を講じる事こそが最重要課題となったのである。

明治政府にあって日本の政治，経済，社会の持っている現実を打開するためにと，西郷隆盛に代表される「征韓論」に見られるような大陸にその活路を見出そうとする事を以て盛んに言われるようになった「北進論」。

これにより，「日清」（明治27＜1894＞－28＜95＞），「日露」（37＜1904＞－38＜05＞）の戦争を経て中国大陸との関わりを強めてきており，その象徴として「満州（帝）国」の建設が行われたわけである。

日中戦争が膠着状態になったために，その打開策，日本の今後の発展のためにと「南進論」が浮上し，これが急速に議論され，推進されるようになっていくのである。

中でも，アメリカによる石油の遮断は日本経済，政治，ひいては社会全体にも重大な影響を与えるものであって，これについての善後策が政府にとっての喫緊の課題となって来たのである。

そこで考えられるようになったのがオランダ領東インド（蘭印，インドネシア）に豊富にある石油で，これの確保に力を注ぐと言う事からも「南進論」が活発化するのである。

既に，19世紀末にその萌芽があった「南進論」は軍事的傾向の強い「北進論」に対して，明治・大正期のそれは経済的進出の側面に重点が置かれ，日清戦争後は，日本の植民地となった台湾を拠点としての経済的発展が活発化していたのである。

それに伴なって，多くの人間が東南アジア一帯に雄飛をするのだったが，その中に三浦襄氏もいたわけである。

そして，それは石油を始めとする物資の確保の重要性と言う観点と結びついた，日本に都合の良い「大東亜共栄圏」の構想を醸成させるのだった。

昭和11（1936）年の広田弘毅首相のもとでの外務・大蔵・陸軍・海軍の「５相会議」で以て「南進論」が日本の外交方針となったのである。

> ちなみにオランダの一歴史家は，前章で述べたように，この1936年をオランダにとって「太平洋戦争の恐怖がピーク」に達した年であると位置づけている。
>
> 後藤乾一『東南アジアから見た近現代日本』　岩波　2012
> 128頁

と言われるように，欧米諸国に警戒感を与えながらも政情打開を考える日本は，翌12年に日中戦争を始める事になるのである。

そして，昭和15（40）年に至り，1939（昭和14）年に始まった第２次大戦でヨーロッパ戦線でのドイツの優位が伝えられると，それに刺激されて，石油，アルミニウム，ゴム等を求めるための武力行使を以ての「南進論」が高まって来るのだった。

それに伴なった仏印進駐といった軍隊の力を行使しての南進政策が実行される事によって，「南進論」は太平洋（大東亜）戦争開始の重要な引き金の役割を果たす事になるのである。

一方，古来，雲南省等の中国南部とビルマとの交易路として発展してきた，「フランス領インドシナ」を通る「ビルマ・ルート（ビルマ・ロード）」が，日中戦争の進行に伴ない，所謂「援蒋ルート」として，中国を援助するための物資の輸送を盛んにしたため，これを遮断すると言う事が問題となり，そこからも「南進論」が浮上してくるのだった。

そこで，ドイツの占領下のフランスにおいて成立したビシー政権との協定に基づき，昭和15（40）年９月に北部を，16（41）年７月には南部をと言うように「仏領インドシナ」を占領すると言う事になるのである。

こうした「南進論」に基づく日本の行動が更に欧米諸国を刺激し，Ｃをカナダとも言うが米・英・中・蘭の国々による「A・B・C・D包囲網」が形成されて日本を圧迫，戦争への歩みを加速させるのだった。

こうして，昭和16年12月８日に大東亜（太平洋・第二次）戦争が勃発するや日本軍は瞬く間に東南アジア一帯を占領，17年には日本軍がビルマを占領する事で以て「援蒋ルート」は遮断される事になったのである。

そして，オランダ領東インド（蘭印，インドネシア）へも進攻する事になるのであるが，中でも，油田地帯のスマトラ島南東部のパレンバンには落下傘部隊が降下して，その石油基地を占領するのだった。

この蘭印進攻に際しては，当初，バリ（島）への進出は考えられてはいなかったと言われているのであるが，アメリカ・オーストラリア軍を東南アジアから遮断するのに適した位置にあるバリ（島）。その南西部クタKutaにトゥバン飛行場があったために，これを確保すると言う事から急遽上陸作戦が展開される事になったのである。

> ちょうど30余年前に，バリ完全征服のためにオランダ軍が上陸を敢行した。南岸のサヌール海岸に，無血上陸し，夜明けとともに要衝デンパッサール市内に突入，同時に同市郊外クータの飛行場を手中に収めた。時を移さずわが航空部隊は同飛行場に進駐，ただちにジャワ上空を制圧して，陸軍部隊の西ジャワ上陸を容易ならしめた。
>
> 越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁－インドネシア独立の蔭に－」インドネシア協会『月刊インドネシア』 第118号 昭和32年　６頁

昭和17年２月18日夜から19日未明にかけて，輸送船「笹子丸」，「相模丸」の二隻に分乗した台湾からの金村亦兵衛大佐率いる陸軍第48師団の一個大隊1,000名の将兵が上陸作戦を敢行するのだった。

写真２　サヌール海岸　バリビーチホテル全景

今日，バリ（島）では景観保持のために椰子の木の高さに建物が制限されており，唯一の例外として日本の賠償で建てられたと言う「バリ・ビーチ・ホテル」があるのだが，それがある南東部のサヌールSanuru海岸へ無血で上陸したのである。そこは30余年前の1906年にオランダがバリ（島）全島を支配下に置くために上陸した所でもあったわけである。

> オランダはスマトラ北部のアチェ人とこのバリ人の征服に散々手古づった。ジャワのすぐ隣のこの小さな島を征服するのに，オランダは前後六回の遠征軍を送り，六十年かかってやっと，1908年に全島の完全支配を確立しえたにすぎなかったのである。
>
> 越野　同上論文　６頁

と言われる程バリ（島）の攻略は難しかったわけであるが，そこを日本軍は無血で以て１日で上陸に成功したと言うのである。

この時，道案内兼通訳として同行したのが三浦氏で，この作戦は抵抗もなく無血だったのだが，バリ（島）の人々に安心感を与えるうえで彼の存在は大きかったと言われているのである。だが，その三浦氏は案内の途中で足を踏み外して右足首を捻挫してしまい難渋するのだった。

尤も，この無血上陸も翌日のアメリカの爆撃機による報復で駆逐艦１隻と乗員60人の犠牲をみる事にはなるのである。

指導者とも言うべき社長堤林数衛氏に率いられ，明治42年５月にジャワ（島）中部のスマランSemarangに到着してインドネシアへやって来た三浦氏はいろいろな事業に携わり，手広く商売をした事もあったが，結局，それをたたむ事になってしまい，そうした中で，過労のため妻の民子を失うのだった。

その間，バリ（島）にも足を伸ばした事はあったが，再婚した仙台の尚籐女学校教師だっ

写真３　トコ・ミウラ

たしげと共に昭和５年11月にバリ（島）に居を構え，デンパサールDenpasarで自転車の店「トコ・ミウラ」を営むのである。だが，昭和８年，４女の誕生を機に家族全員を仙台へ送り返すのである。

> 三浦の家は，表が店で裏が住宅になっていた。この頃の写真を見ると，自転車修理という汚れる仕事であり熱帯であるにも関わらず，きちんとネクタイを締めている。
>
> 原誠「日本人キリスト者三浦襄の『南方関与』一信徒のキリスト教受容に関する一考察―」『東南アジア研究』16巻１号　1978年６月　53頁

と言われる仕事振りだったのである。そこには，

> 日本人は，支那人と間違われやすいため，若い青年でも何れもカイゼル型の美髭を蓄え，カンカンの麦稈帽子かヘルメットを戴いて，洋服は全てオランダ人同様に詰襟の五つ釦を，この暑い熱帯で着用していた。メリヤスやステテコでの姿ではなく，注意を払って日本の体面を重んじていた。苦心の体が窺われるのである。体裁ばかりでなく，対人関係に於いても反感を持たれないように自重していた。
>
> 同上論文　49頁　脚注

という指摘に見られる如く，当時海外へ進出しようとする日本人はその心構えとして，そこにいささかの気負いを感じさせられはするのだが，「一等国日本」と言う気概が前面に現われていたと言う事である。

そうした彼らの言動から当時の日本人のあり方，特に，海外へ進出しようとする者の心象を知る事が出来るのである。

こうした「一等国民」としての相応しい気概を持って「南進」した者達は，

> 彼らは「一人の邦人と雖も過ちを犯さば祖国を傷つけ邦人全体の面目に関したので，日々緊張の生活であり，安易愈安は禁物」という自覚と責任を持ち，「自分の背中には『日の丸』の旗がある」という気持ちを持っていた。
>
> 同上論文　48頁

と指摘を受ける精神的バックボーンを持って渡航していたのである。

これは，単に，「利」を求める商（売）人としてではなく，その前にすべからく自らが日本という国を代表している存在であると言う意識を持つ事が大事であったと言う事で，渡航者はそうした気概を持っていたと言うのである。

そのうえ，三浦氏の場合には，父母ともクリスチャンであり，父は牧師でもあったため，彼も早くからキリスト教に目覚めていたと言う事と，そのインドネシア渡航に際し社員となった「南洋商会」，その社長であり，指導者である堤林和衛からの影響も大きかったと言えるのである。

その「商会」設立についても「神」からの「召命」であると信じていた堤林氏の商（売）人であるにも関わらず，商（売）人の前に宗教者であると言う生活心情を持ったその「生きる」だったのである。

それは16世紀のザビエルに見られる国家発展と一体化した布教活動とは違ってはいるが，キリスト教の布教と言う事が前面に出た商業活動への取り組みは宗教者のものであって，「伝道と商売」と言うあり方，そのためには，個人としても身を律し，精神修養と信仰の向上を常に心掛けなければならないと言うものだったのである。

従って，三浦氏もこれに感化されて渡航したと言ういきさつがあったために三浦氏の中にもそうした姿勢が滲み出ていたと言う事が出来るのである。

そのため，バリ（島）における三浦氏の「生きる」は誠実そのものであって，その点については，筆者旧知のドクター・グデ・グリアも三浦氏が大変やさしい人だったと言っていた。

> かくして同年３月８日，ジャワ全土のかん定成るにおよんで，オランダの400年に及ぶ全インドネシア地域の支配権は完全についえ去ったのであるが，この間バリ島においては，戦局の目覚しいい進展とともに転進し来り，転進し去りゆく陸上部隊，航空部隊の鼻息はまことに当たるべからざるものがあり，ずいぶんと無茶もやれば無理無体もしでかしたことはいなむべくもなかった。
>
> 越野　前掲論文　６頁

そうした三浦氏だったが，戦争が始まり，自らが案内役を務めた金村大佐指揮下の日本陸軍から堀内豊秋大佐率いる海軍の軍政下に入ると言う事となり，自らもその軍政に協力をする事になるのだった。

そして，この堀内大佐こそパレンバンに先立ってスラウェシ（セレベス）島北東端メナド（マナド）へ落下傘で降下した部隊の指揮官で軍律の厳しさで知られる軍人だった。

同年（昭和17年）５月バリ島をふくむ小スンダ列島が，日本海軍の軍政担当地域ときまり，堀内豊秋大佐の指揮する海軍部隊が，北セレベスのメナドから転進し着たって軍政実施に着手するや，同部隊将兵の優れた規律順守により，全バリの治安は一日にして回復し，島民は安堵べん撫して生業にいそしむようになった。

同上論文　６頁

そのためにか，島民との間に問題が起こらなかったわけではないが，現地の人が殺されるというような事はなく，民政部による占領政策にしても，戦後，日本人（兵）が戦争犯罪人として訴えられる事はなかったと言うのである。

それというのも，部隊長堀内司令の人がらにもよることだが，それとともに同大佐が，一人の珍しい日本民間人，三浦襄氏に全幅ナ信頼をかけ，住民統治の仕事を一切ゆだね切ったためであった。

同上論文　６頁

と言われる規律ある統治ではあったが，こうした日本軍（人）とバリ（島）人との間にあって三浦氏はバリ（島）人の立場が損なわれないようにと気を配るのだった。

だが，そうした彼の気配りにも関わらず，日本人（軍）の中にはバリ（島）人に対して理不尽とも言える行為をする者もいなかったわけではなかったのである。そうした場合，三浦氏はバリ（島）人の立場を尊重するよう軍に働きかけるのである。

Ⅱ

日本軍によるバリ（島）上陸作戦に際して通訳，道案内として日本軍に同行した三浦氏だったが，

三浦の最初の仕事は，『サヌール海岸地図』『デンパサール市内図』『クータ飛行場図』『抗日分子一覧表』を作製し，各部隊に配布することであった。次いでラジャ，ポンガワPonggawaを集めて太平洋戦争の意義を通訳し，また自らも演説して「日本の真意」を伝えた。この「真意」とは，日本はインドネシアよりオランダを駆逐し，その解放者として来たのだという意味である。彼はこのような宣撫工作に従事すると共に，軍主計官と共に，銀行，郵便局，質屋を調べ，不正隠匿物資の摘発や，

預金残高，入出金帳簿の調査をし，また重要資源であるキニーネ，阿片の残量調査をしたりした。

原　前掲論文　60頁

と言われる事からその仕事が始まったのであるが，そこには三浦氏が関知しない政治的あるいは日本軍による戦略上の問題が介在していたのは言うまでもない事である。そのために三浦氏は苦労するのである。

日中戦争の膠着状態，また，イギリスやアメリカ等との利害の対立，それに伴なう石油の禁輸を含む日米通商条約の破棄。そうした趨勢の中で行われた昭和15（40）年９月から始まった「第二次日蘭会商」が決裂する事によって欧米列強による「A・B・C・D包囲網」が強化されていったために，これを何とかして打破しなければならないと言った日本の状況が起こって来るのである。

そして，16年７月になると蘭領東インド総督府は日本資産を凍結すると言う挙に出たのである。それは三浦氏のそれとても例外ではなかったのである。

こうした状況から日本はこれ迄の宥和政策から強行・軍事政策へとその政策を転じ，16年９月には東インド進攻計画を発表して南方在留邦人８千名の名簿作製にかかる等，将来の「南方占領」に備えて，そのための基礎的作業とも言うべき事を行うといった状況になっていたのである。(1)

17年11月には「占領地軍政実施ニ関スル陸海軍中央協定」に基づいて，バリ（島）は海軍の軍政地域となる事になって，海軍第21根拠地隊堀内部隊が金村部隊と交代して，その根拠地隊司令部が軍政を掌握する事になったのである。(2)

そして，セレベス（スラウェシ）島のマカッサル（ウジュンパンダン）に海軍民政府が出

写真４　ガジャマダ通り（デンパサールの代表的な通り）

来，17年８月以降，下部組織としてセラム（マルク＜モルッカ＞諸島セラム島）民政部が設立され，バリ（島）はその管轄下に入ったのである。

そうした中にあって，三浦氏は，バリ島軍政にとって必要であると言う事からバリ島の第21根拠地隊司令部の要請に従い，本人も納得の上で同司令部付きとなるのだった。

その間，

> 上陸直後，日本側とバリ側との会談が行なわれた。日本側は陸軍金丸部隊長ほか数名の将校で，通訳として三浦があたり，バリ側はデンパッサルのラジャ Radja，プジャ I Goesti Ketoet Poedja，スランガン書記 I Poetoe Seranganであった。この会談で日本が直ちに軍政を施行すること，また各ラジャを通して，オランダ統治時代の組織による間接統治を決定した。
>
> 同上論文　56頁

と言われるように，未だ陸軍部隊の統治下の時にあって日本軍はその軍政実施にあたりオランダの統治を模倣してラジャ達による間接統治を踏襲する事としたのである。

こうした状況下での三浦氏の「最初の仕事」だったわけである。そして「日・バリ会談」に基づいて８人いるラジャ達はかつての自らの王国だった八つの自治州（県）の長として，日本による軍政に協力する事になるのである。

そうしたラジャの中でバリ（島）中央部の自治州（県・王国）ギャニャールでの親子による首長継嗣問題がこじれると言う事があったが，これについても三浦氏が当事者の間に立ってその解決に尽力をするのだった。

日本が連合国と戦争を開始した事に伴なって，オランダ領東インドにいた2,000人と言われる日本人は全員が検挙されてオーストラリアの収容所へ送られてしまうのだった。(3)

そうした中に，戦前からバリ（島）は魚業の根拠地だったために，多くの日本人漁民が渡ってきており，中でも沖縄出身の者の中にはバリ（島）の女性と結婚する者が少なからずおり，その間に生まれた子供達が父親のいない生活を余儀なくされると言う状況に追い込まれてしまったのである。

そうした子供達の現状を見た三浦氏は彼らを自宅に引き取り，その面倒を見るのである。この事は国や政府の仕事であるとして軍から資金を提供するという申し出があったのだが，三浦氏はこれを断り自らの力を以て彼らの生育にあたったのである。

三浦氏のこうした子供達の面倒を見ると言う正の面がある一方では，それとは比較にならない負の側面とも言える「占領軍現地自活」の方針への協力があるのである。これが日本軍

の兵站・物資供給の基本姿勢になるのだったのだが，これこそが日本軍の持つ致命的問題と言う事になるのだった。

資源の乏しい我が国では戦争に必要な物資，それは軍需物資であり食糧であったわけであるのだが，これを日本から輸送すると言う事は考え得べくもなく，そうした物資の乏しさを補うためにと中国大陸，また，東南アジアへの進出を行ったわけであって，戦局が傾く事によって各戦場においてこれに基づく事件・悲劇が生じるのである。その典型として，飢餓で死んだ日本兵が多かったと言う事である。

それに伴なって，現地住民との確執を生み，更には，反日感情（意識）を持たせる大きな動機付けになるのである。それは，特に，食糧調達と言う点で顕著であって，住民の食糧を強制的に徴収すると言う事が各地で起こり，これが住民の反日意識を更に高め，そのために食糧の調達に協力をする事はおろか，抗日ゲリラになる者も地域によっては多くいたのである。

従って，この方針に基づいてバリ（島）においても日本軍用の食糧調達が行われるようになったのであるが，そのひとつの現象とも言えそうなのが，タバナン州（県・王国）のクランビタン地域の領主であるオカ・シラグナダ家において米の収穫時に日本軍がそれを妨害したと言う事があったと言うのだが，これについては既に前に（ⅤⅡ）で触れている。

そして，

> バリ島で，軍の機構を通じて進められた余剰米は，近接地区に提供した。そして，全く未発達の工業化も軍によって促進された。
>
> 同上論文　57頁

と言われるのである。

そして，その工業化を具体化したものとして，それは17年５月には，豊富な畜産資源を活用して牛豚肉用の缶詰加工工場を作ると言う事業の展開で以て始まるのである。

そのために，島内から牛豚を集荷するための「バリ畜産会」が設立され，製品は日本の「南進政策」の根拠地となった台湾の台湾畜産興業等に出荷されるのだが，三浦氏がその会長に就任するのだった。

> 三浦は，「バリ畜産会」に日本人を一人も参加させずに運営・経理の一切を約三十人の島民に任せた。あくまで島民の生活を向上させたいという三浦の思いからだった。そのころ無給で日本軍のために働いていた三浦は，バリ畜産会から毎月二百ギルダー（当時の邦貨で二百円に相当）の報酬を受けるだけで，収益のほとんどは島民の厚生と宗教覚醒運動の

資金に充てられた。（中略）三浦の指導と島民の努力により，バリ畜産会は着実に事業を伸ばした。

「凛として」 193　17年２月11日付

バリ（島）は古くから八つの王国に分かれ，神に仕える「ブラフマン」と言われる僧侶階級を頂点とし，支配階級の王，そして，それを支える貴族・武士層の「サトリア」がその家臣達と共に支配機構を形づくり，商工業に携わる「ヴァイシャ」，そして，時に，「奴隷」とも訳される事もある「スードラ」と言われる小作人を使って二期作，三期作も可能な米を主とした農業を主産業として生活をして来ていたのである。

「全く未発達の工業化」と言われていたバリ（島）にあって，現在でこそ繊維産業，スーパーマーケットといった商工業は見られるが，産業革命以後の欧米諸国に顕著に見られるようになった近代的工業の勃興はもとより，近代的な経営やそれに伴なう民族的資本家と言った者は育ってはなく，島内の事業と言えば，全て華僑等外国人に占められていたのである。

そうした中で，日本軍と結びついた三浦氏がバリ（島）人のための事業を興こしたと言う事になるのである。

更に，三浦氏は「バリ畜産会」の近くにあった民家を買い取り，食品加工に伴なって出る骨から歯ブラシやボタンを作る工場「三浦商会」を設立するのだった。

そして，デンパサール市内の貧しい島民を集めてはそこで働かせ，製品を海軍軍需部に納品させるのである。ここでも運営はすべて現地人に任せ，代金はそっくり現地人の賃金として支払われ，三浦氏自身は一銭も受け取らなかったと言うのである。

戦局が日本側にとって不利になると共に，セラム民政部は改組され，小スンダ列島を管轄する小スンダ民政部が組織され，バリ（島）の北部シンガラジャに本部が置かれる事になるのだった（18年２月）。

18年５月に至り日本政府はビルマ（ミャンマー）とフィリピンの独立を許容する事になるのだが，一方では，マレー，インドネシアを日本領土に編入する事を決定したのである。

この事は，スカルノ等これ迄その独立のために日本軍に協力してきた民族主義者をして裏切られた思いを抱かせるのだった。そこで日本政府は政治参与の制度を約束して，バリ（島）には小スンダ州（県）会を設置するのである。

日本領土に編入されたインドネシアにおいてスカルノ等の民族主義者は独立への更なる運動を展開するのであって，ジャワ（島）ではインドネシア人と日本人とによって「独立準備会」が設立され，20年５月の第１回の大会でスカルノの主張する「建国五原則」（パンチャシラ）が採択され，６月には新しい大衆組織である「建国同志会」が設立されるのである。

それに伴なって，バリ（島）に「小スンダ建国会」が出来（20年８月11日），三浦氏が日

写真5　インドネシア共和国
初代大統領スカルノ氏

本人の唯一人の参加者として本部次長に就任するのである。

こうして三浦氏はバリ（島）人の独立，インドネシアの独立を願い，そのために奔走したのだったが，そうした三浦氏，特に，日本軍上陸後のバリ（島・人）に対する三浦氏の心情について同氏の甥の原誠氏は，

> アジアの盟主，日本の指導のもとに欧米諸国を駆逐し，バリ島はもちろんインドネシア，そしてアジア十億の民族の自立と解放を進める。この大東亜共栄圏の理念をただ純粋に信じていたのだと思う。
>
> 「凛」 195 『産経新聞』 平成17年２月16日

と指摘しているのである。

そこにこそ彼の思いが込められていたと言えるのであるが，それは日本政府が掲げる「大東亜共栄圏」を全面的に信じ，それを自らの考えとして受け入れていたと言えるである。

だが，その根底にあるものはインドネシアの独立であり，植民地となっていたアジアの国々の独立を願ってのものだったと言えるだろう。

アジアの多くの国々は一般論的に言うならば日本とタイ以外は植民地，あるいは，植民地化されていたのである。そのために三浦氏は自分が長年にわたって関わってきたバリ（島）を始めとするインドネシア，ひいてはアジアの国々の独立を願いその一助としての自分の役割を考えていたと言えるのである。

そこで彼はバリ（島）人に対して，「日本軍の力で独立させる。日本は決してうそをいわ

ない」[4] と日本への信頼を訴え，「いまは犠牲の時代。生みの苦しみのときである」[5] と我慢を説いたのである。

これこそが彼のバリ（島）人に対する心情・信念であり戦時下の苦しい状況にあって自らもこれに耐え，独立へ向かっての窮乏生活をバリ（島）の人々にも要望するのである。

そこにはバリ（島）のみならずインドネシアの独立こそ彼らの幸せに繋がるとし，その独立に日本（人）が手助けをするのであると言うのだが，それに伴なって，そこに彼自身の「使命」と言ったものを感じさせられるものを以て奔走するである。それこそ正に彼のキリスト教徒としての面目躍如たるところと言えるのである。

そして，その独立については，19年９月には小磯国昭内閣においてそれを認めると言う声命が出され，翌20年４月になるとバリ（島）人を母に持ち，初代大統領になる事になるスカルノが来島して声高らかにこれについて演説するのだった。

三浦氏のそうした「使命感」に基づいた活動とは裏腹に，反面ではキリスト教と言う一つの信仰を持つ「信仰者」としてか，はたまた日本人としての故にかバリ人が古来持ち続けてきていた「バリ・ヒンズー」の信仰には違和感を持っていたと言われるのだった。[6]

そして，それは島民のためにどれだけ事業を興し指導しても感謝の念を表そうとしないバリ人の態度から感じさせられたものだったのである。[7]

ところが，そこには，「施した人には神様がお礼を述べ，その人に恵みを与えてくれるので，施しを受けた人は礼を言う必要がない」といった「バリ・ヒンズー」の教えからきていると言われるバリ人の感覚（意識）によるものではあるのだが，日本人の彼にとっては，それは奇異なものと写ったわけである。[8]

そうした違和感を覚えながらもインドネシアの独立を日本の手で達成させる事こそ自らの「使命」であると言う事を感じさせる三浦氏は，そのために日本（軍）人とバリ（島）人と

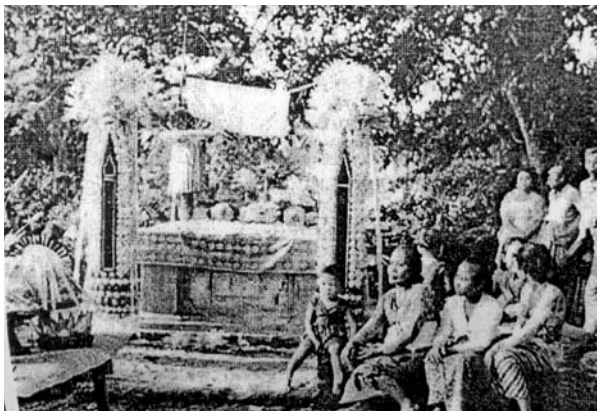

写真６　三浦襄氏の墓

の間に立って奔走し事業に携わる中で，そうしたバリ（島）人の考え方を変えようとするのであるが，彼に残された時間は少なかった。

日本の敗戦と共に命を絶ったのである。

結

自らの「使命」とも取れる三浦氏のバリ（島）でのその「生きる」は何だったのであろうか。

10代の後半に若い雄飛の心に火をつけられて堤林氏の南方進出に誘われ卒業を待たずにインドネシアに渡り，それを契機に同地でいろいろな事業を興し，その労苦の中で前妻を亡くすと言う事にも遭遇するのだった。

また，世界恐慌によりその事業も煽りを受けるといった中で，三浦氏はその「生きる」の場をバリ（島）に求め，そこを「終の棲家」とし，やがては家族をも日本に返し，たった一人でそれを行ったのである。

「人間」の「生きる」において「家族」の持つ意味を高く考える筆者には理解し難いところであるが，現代社会においても「家庭」を顧みずに仕事に打ち込んでいる「人間」が取り沙汰されるが，「家庭」と「仕事」との両立は難しいのだろうか。

そうした三浦氏は，そこにささやかな自転車の店「トコ・ミウラ」を営み，バリ（島）の人々の尊敬を受けながら，それなりの「生きる」を送っていたわけであるのだが，時の大きな流れ，それは大東亜（太平洋・第二次世界）戦争という形を以て三浦氏の「生きる」に作用したのである。

そうした戦争の影響はバリ（島）を深く理解していた三浦氏をして日本（軍）との関わりを強めさせ，そのための事業をバリ（島）人と共に興す一方では，台頭してきた独立への思いを日本（人），自分の手で実現させてあげようと奔走するのである。

それもキリスト教徒としての「使命」に燃えているかのように，自らの心身の衰弱をも顧みずに行ったのである。

そして，その独立に奔走しながら，それが成就出来なかったと言う事に責任を感じ，自ら命を絶ったのだが，そこにはキリスト教徒としての三浦氏は存在しなかったのであろうか。また，「責任をとって切腹する」，「散り際は潔く」と言った日本人的感覚（精神）に基づく自決とも言えるのだが[(9)]，「家族」は遠い日本に残されていたのである。

注

(1) 原誠「日本人キリスト者三浦襄の『南方関与』－信徒のキリスト教受容に関する一考察－」『東南アジア研究』16巻１号　1978年６月　55頁
(2) 早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政の研究』 紀伊国屋書店　昭和34年　109頁
(3) 原　前掲論文　55頁
(4) 同上論文　65頁
(5) 同上論文　65頁
(6) 産経新聞『凛として』 195
(7) 同上記事
(8) 同上記事
(9) 国崎（元内務長）「インドネシアの父三浦襄」『Bali』 第３号，27頁

Research Notes

The Social Climate and Lineage in Bali (The History of Bali 〈Island〉) (XII)

MATSUBARA, Masamichi

This time, I researched of Miura Jou who worked for Bali and Balinese, especially, independence of Indonesia and Bali. He went abroad to Indonesia was accompanied by Tutumibayasi Kazue with other youths as employee of christian on Meiji 42.

Shortly afterward that he stood his own feet, and he started his business in Indonesia. But, he learned, he want to manage small business, so, he opened small bicycle shop named 'Toko Miura' (means「Miura syouten」) at Denpasar in Bali with his family on Syouwa 4.

Afterward he worked at「Toko Miura」until Syouwa 8, then, he send his family to Japan. So, afterward he worked alone in Bali.

After World war Ⅱ broke out, when the army of Japan landed at Sanur beach in Bali on February 17th Syouwa17, he helped the army as interpreter and guide. After then, he worked for the army as adviser.

While, he worked for Indonesian people and Balinese to independent. In such situation Japanese government promised Indonesian people to independent on September 7th 1945. However, World war Ⅱ finished with defeat of Japan. So, Japanese government had to be put off to break the promise to independent and Miura Jou too. Therefore, Miura killed by himself on September 7th, which was the day of schedule to independent.